



道中だより

第 385 号

令和6年1月25日発行

- 巻 頭 言
- 全 日 中 大 会 報 告
- 論 文
- さ り な が ら
- 後 期 情 報
- 事 務 局 日 誌



「開拓の歴史・文化を今に伝える『ばんえい競馬』」帯広市立緑園中学校 大 泉 昭 人



学校は地域に支えられ 地域のために存在する

北海道中学校長会 副会長 盛 永 明 寿

校長として、11年目を迎えた。「道中だより」の巻頭言もこれで2回目となる。前は「学びの共同体」や文部科学大臣表彰のことを書かせていただいた。今回は、私の校長としてのスタンスを確立してくれた、ある周年行事について書かせていただくことにする。

9年ほど前に勤務させていただいたその学校は、周りを牧場に囲まれた小さな学校であった。ただ、校区はとてつもなく広がった。ちょうどその学校は、創立100周年を迎えようとしていた。その記念行事として「百人百キロ駅伝」をやろうということになった。その表題のごとく、100周年を記念して、総勢100人のメンバーがたすきをつなぎ、総走行距離が100kmになるように地域を巡るというものであった。すごく面白いと思ったが、乗り越えなければならないハードルはあまりにも高かった。

まずは、コース沿いの牧場を一軒一軒たずね、「百人百キロ駅伝」の趣旨とそれにかける想いをひたすら語らせていただき、了解と承諾を得ていった。それだけで、数ヶ月かかった。本当に大変だったが、でも、すごくやりがいの感じられる毎日だった。初めて、自分がこの土地にある唯一の学校の校長なんだということを強く認識させられた瞬間でもあった。

それと同時に、学校に対する地域の想いものすごく感じられる貴重な機会だった。

安全対策にも、本当に頭を悩ませられた。伴走や医療対策、熊対策、休憩所の設置、中継所の確保などクリアしなければならない問題が山積みだった。ただ、地域や企業の方々の予想もしなかったような協力や支援が次々と得られ、最終的には、警察や行政の許可も得て、開催できることとなった。

当日は最高の天気になってくれた。沿道には、「この地域で、こんなに人がいるのを見たことがない。」と地域の方が言ってくれるくらい人があふれていた。テレビのニュースでも取り上げていただいた。最後のランナーがゴールした瞬間の地域の方々の笑顔と歓声は今でも決して忘れることができない。

「学校は地域に支えられ、地域の未来のために存在する。」その当たり前のことを実感として感じさせていただいた。本当に私にとって、校長としてのあり方を考えさせていただく貴重な機会となった。

最後に、余談であるが、その学校の校長室には、私の父親の写真も飾られている。これもまた、なかなかないことではないかと私は思っている。

第 74 回全日本中学校長会研究協議会 大分大会

～未来へ つなごう 学びの力 豊の国 おおいたから～



第 74 回全日本中学校長会研究協議会大分大会は「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を形成していく日本人を育てる中学校教育」を研究大会主題とし、全国各地から 1,800 人を超える会員が参加し、ビーコンプラザを主会場に開催された。

3 日間の日程と主な内容について報告する。

◆日程

【第 1 日 10 月 25 日(水)】

- 11:30～13:50 全日中常任理事会
- 14:00～17:00 全日中理事会
- 13:30～14:30 全体協議会運営委員会
- 15:00～17:00 分科会運営委員会
- 18:00～20:00 歓迎の集いレセプション

【第 2 日 10 月 26 日(木)】

- 9:30～10:20 開会式
- 10:30～11:20 文部科学省説明
- 11:25～12:20 全体協議会
- 13:45～16:45 分科会

【第 3 日 10 月 27 日(金)】

- 9:20～9:50 アトラクション
- 10:00～10:20 全体会
- 10:30～12:00 記念講演
- 12:05～12:30 閉会式

◆文部科学省説明

「当面する初等中等教育上の諸課題及び質問事項」

文部科学省大臣官房審議官

安彦 広斉 氏

中教審で現在の学習指導要領の改訂の議論がされる中、様々な専門家の意見を聴く機会がありました。

現在の学習指導要領に規定されている内容がどのように決まっていたかを振り返りながら、改めて総則を思い出し、かみしめていただくところから話を始めます。

これからの教育を考える上で踏まえなければならない特に重要な社会の変化として、世界の人口予測があります。現在、推計値で世界の人口が昨年の 11 月に、80 億を超えました。この増加のトレンドは変わらず、子供たちは日本のどこに住んでいても、この世界的な人口増加の影響からは逃れられません。

その一方で日本の人口は、ピークアウトし、減少局面に入っており、2056 年には 1 億人を割るとするのが最新の推計であります。高齢化も進み、生産年齢人口もどんどん減っていきます。自治体の人口減も大きく、地域経済が縮小していき、様々なサービスが低下していくことが懸念され、「静かな有事」という物騒な言葉で表現される状況となっています。

そんな状況の中でも、1 人当たりの労働生産性を上げればなんとかなるという見方もありますが、日本はそれほど高くないというのが現状です。企業の



株式の時価総額も、平成の始まりには日本企業が世界のトップ 50 で圧倒的な地位を占めていましたが、現在はトヨタだけとなっています。

そんな現状において、教育は日本の強みとなっています。PISA2018 では、読解力は様々な課題があり順位を少し下げましたが、いずれもトップクラスにいます。TIMSS2019 でも、多くの人口を有する国の中でトップクラスにいます。特に小学校の理科ですが、勉強が楽しいと思っている子供たちも平均を上回っており、この先がとても楽しみです。間もなく中学生になりますが、引き続き楽しく勉強に取り組めるようよろしくお願いします。

アジアの国々がお互いをどう見ているかという調査もあります。80%を超える国が日本は好ましいと思っていますが、近隣の中国と韓国では低い数字になっています。ここにきて様々な子供たちの交流事業が復活していますが、交流の様子を見ていると、実際は決してこんな低い数字ではないと感じます。非常にフレンドリーな関係性を築くことができている、この先は大丈夫だろうと思っています。これもまた日本の強みだと思っています。

企業ではグーグルががんばっていますが、現在、日本では国が主導し強みとすべく量子コンピューターの開発に取り組んでおり、基礎研究の充実を図っています。こういった基礎研究の成果はノーベル賞の受賞者数に影響を与えるものであります。過去の基礎研究への投資の成果が今生きて、2001 年以降はアメリカに次いで受賞者数が 2 位となっており、基礎的な教育から研究にまでつなげていくことが上手くいったからこそその結果であり、こういったところも日本の教育の強みと言えます。

逆に気がかりな点ですが、休日に全然勉強していない生徒の現状です。高校受験のせい、中 3 は 1 割程度ですが、高校生に入ってから 3 割以上おり、厚労省と合同で実施している 2013 年以降の調査では高止まりの傾向がみられます。こういった高校生の自己肯定感を世界と比較してみると、学習指導要領の改訂につながる中教審の議論でも紹介されましたが、「自分はだめな人間だと思ふことがある。」の回答が 72.5%でと断トツで高くなっています。先ほどの学力に関する国際調査であれだけ良い結果を残しているにも拘わらず、「人並の能力がある。」は 55.7%、「勉強は得意な方である。」は 23.4%と、この数値からも自己肯定感が非常に低いことが分かります。この要因をいろいろと分析していますが、明確にこれ

だということは分かっていません。

この一方で 2013 年から OECD の TALIS に参加し、教えている先生方の自己効力感についても調査しています。自己効力感とは、先生が生徒に関わることによって生徒を良く変えることができたという実感をどれだけもっているかを表す指標です。世界と比べると、日本の先生方はあまり自己効力感をもてていないことが分かります。ただこれは目の前の子供たちにしっかりと向き合い、分析していることの裏返しだと理解しています。長らく教員政策に関わってきた経験から、日本の教員の優秀さは世界でトップクラスではなく、トップだと私は確信しております。PISA 調査で上位にある国の教員が、なぜこんなに日本の教員は優秀なのかと何回も何回も学びにきています。日本の教員は絶え間なく自己研さんに励み、また先生同士で様々な研究会に取り組んでおり、そういったことが積み上がっての結果だと考えています。

もう一つ気がかりな数値があります。今年度の学力・学習状況調査で「将来の夢や目標をもっていますか。」という質問に対し、コロナ前後で比較すると、小学生も中学生も 5 ポイント以上下がり、それがなかなかコロナ前の状況に戻りません。この質問はウェルビーイングを測る指標の 1 つでもあり、この数値をきちんと上げていく取組をしなければならないと考えています。先般公表しましたが、不登校やいじめも増加しており、このあたりのことも課題だと認識しております。

新たな教育振興基本計画についてですが、「持続可能な社会の創り手の育成」「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」をキーコンセプトにしています。特に、ウェルビーイングが重要な概念であります。一人一人の個人の幸せや生きがいに留まらず、地域であったり社会であったり、また学校現場が幸せや豊かさを感じられるようになることが大切なことであり、教育を通じてウェルビーイングを向上させていくことを目指して、これをコンセプトの真ん中に位置付けて取り組んでいこうということでもあります。

教育課程についての説明に移ります。次の学習指導要領について触れてほしいとの御要望をいただいております。現在の学習指導要領の実現を支援していく中でいよいよその実態を把握し、中教審での専門的な議論につなげていくことになると考えています。標準授業時数や中学校での 35 人学級の実現などいろいろ議論はありますが、各学校における柔軟な教育課程の編成やインクルーシブ教育の推進も重要な視点と捉えつ

つ検討していくことになろうかと思います。

高校で情報Ⅰ・Ⅱが新設されましたが、今後中学校において技術科が情報に変わるのかとどうかということがあります。学習指導要領で情報活用能力は学習の基盤となる資質・能力と明記され、小学校ではプログラミング学習において体験的な学習を通して論理的な思考力を育んでいこうという取組が始まっています。中学校技術科においても情報領域の内容を充実させました。現時点では技術科が情報科に変わる、もしくは4領域の中からスピノフして情報科になるのかどうかという具体的な検討があるわけではありませんが、小中高のつながりも含めて、今後どのように情報教育を充実させていくかは検討していくべきであろうと考えています。

情報活用能力は特定の教科だけで身に付くものではなく、国語も大きな役割を担いますし、数学も大きく関わっており、もっと言えば全ての教科が深く関わっているものと捉えていただく必要があります。技術科だけに任せておけばいいというのは大間違いであります。仮に何らかの形で情報科が新設されたとしても各教科との関連を図ることが重要であり、新たなリテラシーとして情報活能力を位置付け、教育課程全体で育成に取り組んでいただきますようお願いいたします。そして、基礎的なリテラシーの概念が社会の変化に伴い大きく変化していることが基盤にあるということを踏まえ、今一度学習指導要領をお読みいただければと思います。

生成 AI をどのようにして学びに生かしていくかという御質問もいただいております。生成 AI の活用にあたっては、宿題の出し方や出されたものをどう評価するかを考え直す良い機会と捉え、著作権などに留意しながら、使える環境があれば積極的に取り入れていく、そのためにもまずは先生方も使ってみるというのが良いのだらうと考えています。便利な一方でだめところもあるなということを是非実感してみて、これって教育でどう使えるのだらうということに思いを巡らしていただけると、この次に来る波においていかれることなく対応できるのだらうと思います。

生徒指導・進路指導についてです。先程も触れましたが不登校が急増しています。コロナが引き金になったとはいえ、そのベースに何があったのだらうという視点に立って要因を深く分析していく必要があると考えています。まずは対処療法的なところで学校も子供たちが放っておかれることのないように

しようというところが大事で、中長期的には予備軍も含めて居づらさって何なのだろうということを紐解いていくことが大切だと考えています。先ほどの自己肯定感の低さにもかなり関係している現象なのだろうと思っています。

こうした不登校への対策として、「COCOLO プラン（誰一人取り残されない学びの保障に向けた不登校対策）」の取組を始めました。「不登校の子供たち全ての学び場を確保し、学びたいと思ったときに学べる環境を整える」「心の小さな SOS を見逃さず、『チーム学校』で支援する」「学校の風土を『見える化』を通じて、学校を『みんなで安心して学べる』場所にする」ことが主な内容となっています。

いじめも増加してきており、重大事態の発生件数も増えてきています。これは、いじめ認知の感度があがってきていることと理解しております。ただ起きていることは重大事態なので、そこをどう後手に回ることなく対処していくかというところは大事な視点だと考えております。

子供たちの自殺者数も近年増加傾向にあり、令和4年は過去最高となっております。これは色々な背景があるのだと思います。不登校もいじめも問題行動も、それから家庭における虐待の件数も増えていることもそうですが、様々な要素が子供たちに降りかかっている中でどれが特定の原因なのかはわからない訳で、子供たちの心の発露の仕方が不登校という形で出るのか、暴力行為なのか、いじめなのか、多様な形をとっているということであり、子供たちをよく観察してその根っこにあるものを探っていくことが大切だと考えています。

月別の自殺者数を見ると、有名芸能人の自殺の翌月に多くなっています。自殺を企図するには何かしらの引き金があるわけで、厚生労働省ではゲートキーパーにつなげて何とか自殺を思い留まらせることに取り組んでいますが、学校でもそういういった報道の後には注意して子供たちの様子を見ていただき、必要であればフォローをお願いします。

校則についての御質問もありました。最近ブラック校則が話題になっており、子供たちも保護者も関心が高く、学校への圧が高まっているのではないのでしょうか。対応の基本は、社会通念に照らし合わせて合理的かどうかであり、ここが担保されているのであれば大きな問題にはならないものと考えております。そして、何でその校則があるのかを子供たちに考えさせ、理解させることが大切なことだと思いま

す。校内で議論をとどめずに、学校運営協議会の場などを利用して広く意見や考えを求め、何ができて何ができないのか、何のためにこの校則があるのかを共有して、最終的には校長先生として結論付けていただきたいと思います。

様々な専門性をもった職員の配置についての今後の見通しについてもお尋ねがありました。SCやSSCは重点配置校を増やして学校への支援を充実させていけるよう、現在概算要求をがんばっています。学校が抱える課題が複雑化する中、法令について高い専門性を有するスクールロイヤーの存在は重要なことだと考えています。ただ法律の条文には詳しいけれども、学校現場の実態を踏まえた教育法規の運用に詳しいという弁護士はそう多くはありません。育てるという意味でもSRの配置を拡充していくことは大切なことだと思っています。

コミュニティ・スクールについてです。スクールコミュニティという言葉もあります。学校を中心に社会教育を盛り上げていこうとする活動で、それはそれで地域学校協働本部を中心に取り組むことは大事なことです。学校の中に学校運営協議会をしっかりと位置付けることもまた大事なことです。学校運営協議会委員の人選にあたっては、大所高所から助言をいただける方もいいのですが、学校のことを考えて動ける人にやってもらうという視点も大切です。

「学校の業務だが、必ずしも教員が担う必要のない業務」や「教員の業務だが、負担軽減が可能な業務」、こういったところで有効な場合がたくさんあると思います。運営協議会は学校の中の組織ですが、そことつながった地域社会で担っていただけるものはどんどん外に出していくという発想が重要です。まずはスタートさせ、良い先行事例を参考にコミュニティ・スクールを機能させていくことが目標となります。地域の教育資源の活用にあたってその一切合切を引き受け、先生方の負担が大きく減ったという事例や、不登校が減った、働き方改革が進み在校等時間が短くなった、生徒指導上の課題を地域と一緒に解決したことで補導件数が激減したという自治体の報告もあります。

最後に、専門学校について触れます。なぜ専門高校なのかですが、子供たちの進路選択について少し課題意識があります。専門高校の多くが定員割れをしている一方で、一次産業を盛り上げるとか橋や道路を造るという話になったときに、人がいないということで各省庁から専門学校の定員を増やしてくれ

という要望が相当きている現状があります。ものすごいミスマッチが起きており、この状況をどう子供たちの進路選択につなげていくかというのは、とても大事なことだと認識しています。進路指導とかキャリア教育というのがどんどん教科の外に出ていって、授業の時間数も減っていく中で、そういった仕事の魅力を伝えるというのは難しいことだと思います。子供たちが正しく選択することなく、入りやすい普通科に入学して勉強しなくなるということが結構当たり前のようになります。今後、都道府県立学校もコミュニティ・スクールを導入していくことになります。中学校の先生方もそこに上手く巻き込まれて、高校卒業後の進路を見据えたより良い進路を選択する力を中学校で培っていただきますようお願いいたします。

子供たちはこれからの難しい時代を生きていくことになります。難しい問題に直面したとき、それでもニヤッと笑うくらいのたくましい子供たちを是非先生方に育ていただき、新しい時代でも子供たちが元気よく生きていける、未来を切り拓いていけるように、日々の先生方の御活躍を期待申し上げます。

◆全体協議会

■第1研究協議議題 全日中提案

学校からの教育改革「近年の調査研究報告書から読み取れる学校部活動に係る課題と地域移行に向けて」

全日本中学校長会生徒指導部長 遠藤 哲也

「全日中新教育ビジョン—学校からの教育改革—」の「提言5 スポーツ教育・芸術教育」には、「ガイドラインに基づく部活動推進と望ましいスポーツ環境、文化的環境の提供」「部活動の意義を踏まえた持続可能な部活動の推進」「学校と地域が連携・協働した形での地域におけるスポーツ環境、文化的環境の整備」等、行動指針が記されている。全日本中学校長会生徒指導部は、全日本中学校長会による近年の調査報告書から読み取れる学校部活動の課題を踏まえ、その解決に向けた考察を提言した。

(1)令和4年度調査結果から読み取れる課題

*ガイドライン：令和4年12月にスポーツ庁と文化庁が公表した「学校部活動及び新たな地域クラブ活動の在り方等に関する総合的なガイドライン」

*調査における「部活動」：ガイドラインにおける「学校部活動」

①多くの「学校の設置者」、つまり教育委員会も含めた自治体においては、ガイドラインに沿った対応は道半ばである。

- ②「部活動指導員の導入は進んでいるが、まだまだ改善の余地が大いにある。
- ③今後、学校と地域の連携・協働を推進するための体制整備において、自治体間での大きな差が生じるのではないかと懸念している。
- ④多くの学校で「部活動指導における教員の負担や顧問の決定」が、長期にわたり懸案事項となっている。
- ⑤学校部活動を減らしたくてもできない現状があり、まさに教師の献身的な支えにより、必ずしも担う必要のない業務である学校部活動が継続されている。
- ⑥大会参加を主たる目的に合同チームを結成する部活動がある中、日本中学校体育連盟では、令和 5 年度から一定の条件を満たせば、全国中学校体育大会において地域クラブ活動の参加を認めた。各地域の実態に応じて、中学校が関係諸機関と連携していくことが重要だと考える。

(2)提言

- ①校長の意識改革 少子化や働き方改革が問われる中、これまでの指導体制を維持することは難しい。「平日」の学校部活動の地域移行も見通される中、「学校部活動が存在しない学校」も出てくるであろう。学校部活動の成功体験によらない、生徒の健全育成や教師の人材育成を探るに当たって、まずは校長の意識改革が重要である。
- ②域内の中学校における連携強化 各校においては、地域で生徒の学びを支える「地域学校協働活動」を推し進めているところである。しかし、校長がどれだけ自校の組織運営改革を進めたところで、1 校からの発信や取組には限界がある。まずは域内にある全中学校で「学校部活動の地域クラブ活動への移行」に係る共通理解を徹底し、域内の中学生の実態に応じた「地域クラブ像」を構築していきたい。そして、生徒のスポーツや文化の環境の構築を図りたい。
- ③持続可能な指導・運営体制の構築 それぞれに地域における持続可能な指導・運営体制の構築のためには、中学生の実態やニーズを把握している中学校の役割は重要である。全日本中学校長会としては、全国の中学生の活躍できる場の創出と教師のウェルビーイングの実現に寄与していきたい。

■第 2 研究協議題 近畿地区提案

主体的に言語・テキストを使いこなす生徒の育成に向けて—PISA 型読解力育成事業を通して見えてきたもの—

京都府宇治市立広野中学校長 藤本 いずみ

時代が急激に変化し、予測ができない社会では、ただ単に情報を読み取るだけではなく、自らが問題を見極め、解決していく力が求められる。そのためには、文章だけではなくグラフや図、他の人からの意見などを総合的に理解した上で、新たな考えを導き出し、振り返りながら考えを深めていく力が必要になる。その総合的な力である PISA 型読解力の育成を目指した実践を提言した。

(1)主な研究活動

① 各教科での授業改善（通年での活動）

- ア 各教科による課題解決型学習（PBL）の要素を取り入れた改善
- イ 個人の伸びの見える化を目指した改善
- ウ 到達目標の共有に向けた到達点（ルーブリック）の設定

②総合的な学習の時間を軸にした取組

アきょうと明日へのチャレンジコンテスト

③従来の取組の意義を確認した上での継続実施

(2)研究の成果（2 年目まで）

① 各教科での授業改善（通年での活動）

- ア 各教科による課題解決型学習（PBL）の要素を取り入れた改善 単元やまとまりを意識した授業展開が見られようになった。振り返りや課題に対する文章表記での回答では、その分量や内容ともに増加・深化している様子も見られた。
- イ 個人の伸びの見える化を目指した改善 単元内のそれぞれの授業で提示される課題の関連性や単元課題ごとの関連性などを意識した課題が見られるようになってきた。授業内容をメタ的に捉えられるようになったことは大きな成果であった。
- ウ 到達目標の共有に向けた到達点（ルーブリック）の設定 ルーブリックの作成は、課題の解決に有効な手だてになると考えられる。またルーブリックを作成することで、出題する側である教員も解答者である生徒に求める質についてより強く意識することになり、的を絞った授業を展開できるとの感想があった。

② 総合的な学習

きょうと明日へのチャレンジコンテスト それぞれの教員が教科の専門性だけでなく、社会との接点を意識する機会となり、教科の授業改善が社会との接点を意識したものになった。

③ 生徒の変容

令和 4 年度中学校 3 年生の質問紙調査において、2 年次との経年比較で、「授業で学んだことと以前

の学びとのつながりを感じた。」と回答した生徒が増加した。また学習の内容を理解する際に、生徒個々で内的な変化が見られた。学習内容を自らの言葉に置き換えて理解しようとするが進み、学びの中からさらに興味をもって前向きになる生徒が増えている。令和4年度の全国学力学習状況調査では無回答の割合が減少に転じた。

◆分科会

8つの分科会に分かれ、それぞれの担当地区から研究の取組と成果・課題について提案があり、熱心な研究協議が行われた。

第7分科会：北海道地区

〈多様化した学校教育課題に対応できる教員の育成〉

・教員自ら学び成長する学校づくりを通して

北海道函館市立銭亀沢中学校長 橋本 智也

・協働と意識改革を軸に学校力を向上させる学校経営の在り方

北海道八雲町立野田生中学校長 増田 正弘



函館市中学校長会では、学び合う学校文化の醸成による学校改善を目指し、「変化を前向きに受け止め常に学び続ける教員」の育成に向け、不登校への対応や教育

的支援を必要とする生徒数の増加、ICT 活用による授業改善等を地区の大きな課題として捉え、組織的な取組を進めている。具体的には、アンケート結果をエビデンスとし、函館市中学校長会としては①生き生きセミナー、②特別研修会、③北海道における教員育成指標の活用に取り組み、また各校においては①若手教員の育成（初任者教員を軸にしたメンター研修・若手教員による学校評価の改善）、②ミドルリーダーの育成（プロジェクトチームによる経営参画・推進チームによる学校課題解決）、③ベテラン教員のスキルアップ（意識改革による行動変容・ICT 活用の日常化に向けた取組）を推進している。成果として、①学校経営参画意識の高揚、②個々の教員の成長や取り組むべき内容の具体化、③研さんを積もうとする前向きな空気の醸成、④教育改革への確かな手応え、⑤OJT への前向きな取組と積極的な ICT 活用が得られた。

渡島小中学校長会では、総合的な学校力の向上のために、教職員一人一人がそれぞれの役割を理解して適時適切に協働できる力を身に付けさせる組織的な研究



を進めている。具体的には、①小中別の研究課題を設定して研究に取り組み、8月に開催される研究大会で発表し、研究討議で揉み、積み上げていく、②渡島管内を3つのブロックに分け、ブロックごとに研究会を開催し、研究テーマに沿って研究討議をし、議論を深めている。成果として、①学校力向上のために、校長に必要な3つの強いリーダーシップ（職員間のコミュニケーションを充実させるリーダーシップ・ビジョンを明確に示すリーダーシップ・持続可能な組織編制と環境整備によるリーダーシップ）を明らかにし、②信頼づくりや心理的安全性確保から組織力をアップさせたり、教員の潜在能力を引き出したりするためには、コーチングの手法を活用した「傾聴」が根本的に大切なツールであることが分かった。



分科会の最後に、全日中を代表して道中 森田会長から函館市中学校会の提言発表とその後の各グループでの研究討議の様子を踏まえた振り返りと助言が行われ、参加者全員が確かな成果を感じ分科会を終えた。

なお、橋本、増田、両氏の提案の詳細については会誌「全道中」No.93号（令和6年3月1日発行予定）に掲載する予定である。

他の分科会の研究協議題と概要は次のとおりである。

第1分科会：九州地区

〈「カリキュラム・マネジメント」の推進〉

地区校長会の相互支援を通したカリキュラム・マネジメントの推進の事例、学校教育の改善・充実に向けた「社会に開かれた教育課程」の実践の事例が発表された。

第2分科会：四国地区

〈「主体的・対話的で深い学び」の実現〉

ふるさと学習で育てる自尊感情の高まりと自己肯

定感・自己有用感の獲得の事例、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な育成を通じた課題改善の事例が発表された。

第3分科会：東海北陸地区

〈よりよく生きようとする意思や能力を育む道德教育の充実〉

特別の教科 道德における 1 人 1 台端末を活用した教育実践の充実の事例、「自分らしさ」をキーワードにした道德教育の充実の事例が発表された。

第4分科会：東北地区

〈健康で安全な生活と豊かなスポーツライフを実現するための教育の充実〉

それぞれの学校の健康課題への地区中学校長会としての取組の事例、関係機関との共同研究による運動好きの生徒を育む組織的な取組の事例が発表された。

第5分科会：関東地区

〈社会的・職業的自立に向けたキャリア教育と進路指導の充実〉

教育活動全体を通して取り組むキャリア教育の事例、地域学習や地域連携を通して進めるキャリア教育の事例が発表された。

第6分科会：中国地区

〈自他を敬愛し他者と協働しながら自己実現を図るための自己指導能力を育成する生徒指導の充実〉

生徒の活動を中心に据えた学校経営の事例、短時間グループアプローチ（だんだんタイム）の取組の事例が発表された。

第8分科会：近畿地区

〈学校と地域の連携・協働による「チーム学校」の実現〉

学校における多様性の実現：地域や関係機関との連携に学びの場づくりの事例、地域とともに地域の子供たちを育てる学校の取組の事例が発表された。

◆アトラクション 「チアリーディング」

日本文理大学チアリーディング部 BRAVES

日本文理大学チアリーディング部 BRAVES は 1994 年 4 月に女子チームとして、チアリーダー同好会を設立。その後、1999 年より「男女混成チーム」として新たにスタートした。チーム名「BRAVES」は (brave⇒勇敢な) に由来し、「チャレンジを続ける勇気と強さ、

そして優しさをもち続ける」という想いがこめられている。様々な大会に出場するとともに、「大分を元気に」というスローガンの下、地域でのイベントやお祭りなどにも参加している。

会場の手拍子と一体となって華麗な演技が披露され、「元気」「勇気」「笑顔」、そして「感動」に場内からは盛大な拍手が送られた。

◆全大会 大会宣言決議

◆記念講演 演題「スポーツ実況 47 年～感動を伝えるということ～」

講師 フリーアナウンサー (元 NHK アナウンサー)

工藤 三郎 氏

大分市出身のフリーアナウンサーの工藤氏は、NHK アナウンサーとしてこれまでおよそ 40 年にわたり、プロ野球、ゴルフ、陸上競技、スキーのジャンプなどのスポーツ実況放送に携わってきた。



数々のオリンピックも担当し、ロンドンとソチでは現地キャスターを担当。バルセロナ、シドニー、ソルトレークシティなど、数回にわたり開閉会式の実況放送も務めた。「立て、立て、立ってくれ!」の実況をした冬季長野オリンピックのジャンプ競技や、日本が金メダルを獲得した北京オリンピックの女子ソフトボール決勝など、多くの名場面に立ち合い、私たちにその感動を伝えてくれた。

実際の映像を使い当時の様子を説明しながら、時代とともに移り変わるスポーツの世界の実相について講演された。AI のアルゴリズムを補う人間の感性 (勘や根性)、指令・命令から選手の自主性を育てる指導への変化など、今後の中学校部活動の在り方を考える上で大いに示唆に富む内容であった。

◆閉会式

齊藤大会長、山本実行委員長が今大会を振り返り、成果を確認するとともに、それを明日からの学校経営の確実な前進に結びつけていくことを呼びかけた。

その後、次年度開催となる岩手県より、その自然、歴史、産業を背景とする風土の紹介と大会準備の進捗状況等を含めた挨拶があった。挨拶終了にあわせて岩手県からの参加者一同が会場の参加者に向かって一礼し、全ての日程を終了した。

論文

小中連携プロジェクトを活用した
協働的な子供の育成

七飯町立大中山中学校 小林 和規

1 はじめに

小中連携推進計画は平成31年度から「コロナ禍」による活動制限により、なかば中断した形となった。一方それまでは、大中山地区小中連携委員会の各推進会議（学力・生活・特別支援）による充実した取組が行われてきた実績がある。

ポストコロナ・ウイズコロナを見据えた小中連携の推進を実施するには、「連携内容・活動・業務の推進」、「連携準備にかかる時間の縮減」、「児童生徒の活動形態の工夫」等の視点が必要である。

メインとなるプロジェクト委員会を小中に分け、タブレット等を有効に活用した連携交流の工夫やベースとなるプロジェクト内容を3年程度で改善への振り返りを行うことを含めた。大中山地区の学校規模は、大中山小学校：674人、大中山中学校：326人である。本校校区は、近年人口が増加傾向の地区でもあり、大規模な学校同士での連携強化が必要となっている。

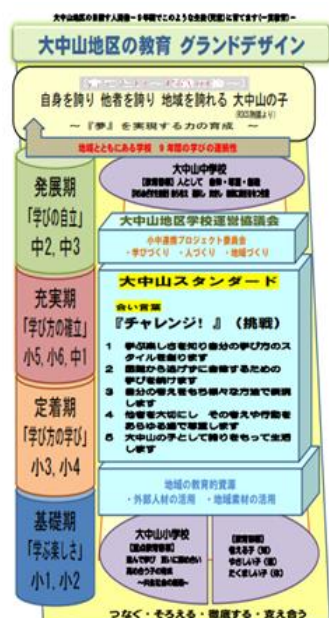
2 大中山スタンダードの確立

期日を定めて『幹となる活動』を設定し、具体的に取り組んでいく。

「チャレンジ」（挑戦）を合言葉に、発達段階に合わせた小中の連続性・発展性を意識した共通の取組を実践している。学校運営協議会に協力を求め、地域人材バンクのリスト作成とともに、地域の教育資源（外部人材・地域素材）を活用し、児童生徒が

日常では体験できない活動などを設定し、小中合同の学びの機会を充実させる。

大中山地区の児童生徒が、『地域とともにある学校“9年間”の学びの連続性』の中で、「育てたい15歳の姿」の実現を目指して、健やかに成長することができるよう連携を図っていく。



3 大中山小中学校連携プロジェクト委員会の取組

事務局を中心に、年間計画を作成し、各プロジェクト委員会が、計画・実施のための打ち合わせを行い、活動を推進している。

【学びづくりプロジェクト】

- (1)ICTの活用状況や、情報活用能力系統表の作成と分析・修正
- (2)全国学力・学習状況調査の分析・交流
- (3)総合的な学習の時間の発表会等の参観交流
- (4)出前授業や体験授業の実施

【人づくりプロジェクト】

- (1)生徒会・児童会による挨拶交流
- (2)生徒会・児童会によるいじめ防止取組の実践交流
- (3)長期休業中のきまりの交流
- (4)特別支援学級交流及び交流授業の推進・実施

【地域づくりプロジェクト】

- (1)小中共通の家庭学習強調週間の実施
- (2)プルタブ回収チラシ配布
- (3)0のつく日の取組（登校時の見守り運動）
- (4)地域主体の七夕祭りのルールづくり



4 終わりに

コロナ明けの今年度は、計画の推進に伴い、各プロジェクトの推進を進めているところではあるが、コロナ前の引継ぎや担当者間の共通理解が十分ではなく、活動の時期が遅くなってしまった。今後、各プロジェクトの推進には、主幹教諭を中心に計画の見直しを含め、新たな活動を模索するなど、これまでの子供の変容に着目した取組の検証・改善が必要である。子供たちは「地域の宝」と言われているように、地域にある学校の児童生徒のために、実効性のある計画・推進を図っていきたい。

論文

教師力を高めるシステムづくり ～心理的安全性と人材育成の仕掛け～

函館市立戸井学園 池田浩司

1 はじめに

本校は令和3年度に開校した、函館市初の義務教育学校である。小学校2校、中学校2校が統合した。1～4年生、5～7年生、8～9年生の3つのステージ、いわゆる4-3-2制である。6年生から7年生(中1)にスムーズに進級できるので、中1ギャップが起こらず、開校以来、今のところ「不登校ゼロ」である。

本校に学校視察に訪れたり、開校までの道のりや義務教育学校のシステムに関心が高い教育委員会もあったりと注目されている。また、保護者や地域の協力が厚く、まさに「地域とともにある学校」が実現できている。隣には唯一の函館市立の幼稚園があり、幼小中連携ができており、12年間のスパンで教育活動を行える地域である。教職員とは「子ども大事」を合言葉に、誰一人取り残さない教育を目指している。

2 教員の文化の融合と心理的安全性

開校当時、唯一の課題と言えば、「教員の文化の融合」であった。「小学校はこうだった」「中学校はこうだった」という声が結構あったが、全教職員であくまでも「新しい学校」を意識して取り組み、教職員同士の「心理的安全性」を向上させるため、同じ方向に向かわせる取組が必要であった。

(1) 人事評価シートの活用

シートの「今期の具体的な目標」「目標達成のため

【今期の具体的な目標】から抜粋

＜「学習指導」編＞

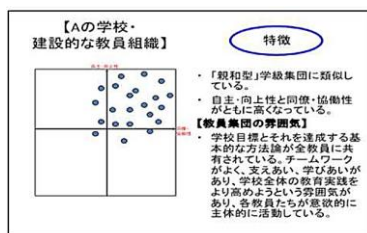
- ・ 個の学力を伸ばす授業の提供
- ・ 自己実現につながるキャリア教育の充実
- ・ 自分の考えを持ち、自ら課題を解決する資質・能力を育成する。
- ・ 9年間の学びを意識し、自分に合った学習方法と学習習慣を身に付けさせる。
- ・ 教科の内容をスパイラルでつながりを見出し、つながりのある授業を実践する。
- ・ 「指導と評価の一体化」を実現するための授業改善を行う。

の取組方法等」の項目について、それぞれの記載内容を抜粋して提示した。同じような目標等から相互協力を引き出し、

目標達成への推進力を高めるのがねらいである。

(2) 組織アンケートの実施

学校組織マネジメント研修の際に学んだ「組織アンケート」を実施した。縦軸が「自主・向上性」、横軸が「同僚・協働性」である。右上になるほど「親和型」の教職員組織ということになる。現状を選択させたら、



「親和型」が一番多く、一部「かたさの見られる型」と感じている教職員もいたが、「ウェルビーイング」な組織に近付くように意識させることができた。

3 人材育成の仕掛けによるシステムづくり

(1) 若手教員とベテラン教員の相互成長

1年目は「メンター研修」、2年目は全員対象の「Toi研修」、3年目は座談会的な「ToiTalk」。若手教員とベテラン教員の相互成長を促すことができた。

(2) DCAP サイクルの導入

行事実施後、掲示してある実施要項に即座に反省事項を各々が付箋に書き、それを受けて担当者が事後プランを作成。分掌部会→校務運営会議→職員会議を通して、その年度のうちに次年度の要項を作成する「事案決定システム」を導入した。働き方改革にもつながる取組となっている。



(3) 学校評価の見える化

今年度のゴールとなる「学校評価」の項目を教育

目標ごとに整理

し「見える化」

した。ゴールを

把握したうえで

教育活動を推進

できるため、取

組も明確とな

り、スピード感

のある学校改善が

でき、評価も上がった。

評価項目	評価基準	評価結果	評価者	評価内容
1. 学校の教育目標の達成状況	1.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
2. 授業の質の向上に向けた取組の状況	2.5	達成	校長	「授業の質の向上に向けた取組」が、どの学年でも達成されている。
3. 授業の質の向上に向けた取組の状況	3.5	達成	校長	「授業の質の向上に向けた取組」が、どの学年でも達成されている。
4. 「児童の学力を伸ばす授業の提供」の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
5. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
6. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
7. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
8. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
9. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
10. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
11. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
12. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
13. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
14. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
15. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
16. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
17. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
18. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
19. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。
20. 児童の学力を伸ばす授業の提供の取組	2.5	達成	校長	「児童の学力を伸ばす授業の提供」が、どの学年でも達成されている。

(4) 一貫した校長の語り

何よりも校長の信念がブレないように努めた。朝の打ち合わせ、全校集会、学校通信、校長通信等で、児童生徒、教職員、保護者、地域住民に対して一貫した内容で経営方針を語るように心がけた。

4 おわりに

ここ2年間、教頭受検者を毎年輩出できている。人材育成の仕掛けによって、教職員の意識を高めることができたからである。「マネジメントとは組織をもって成果を出すこと」「システムをシンプルに」「当たり前のことを徹底」することで、「子ども大事」の学校経営ができると考えている。

論 文

感『そうべつ型ふるさと教育』の取組 ～教育旅行を活用した「ふるさと学習」の充実～

壮瞥町立壮瞥中学校 赤 川 欣 胤

1 はじめに

本町は、胆振西部に位置する人口 2,400 人足らずの小さな町である。洞爺湖南東岸に面し、有珠山・昭和新山という火山を抱え、「洞爺湖有珠山ジオパーク」としてユネスコに認定されており、年間を通じて国内外問わず多くの観光客が訪れる町でもある。

町内の児童生徒数は、総人口に比例して減少傾向にあるものの、早くからCSを導入するなど、町の教育への関心は高く、令和7年に中学校が新校舎に移転することを機に、町をあげて小中一貫教育を推進することが決まり、日々、関係者による協議や準備が計画的に進められているところである。

2 『そうべつ型ふるさと教育』の取組

小中一貫教育の推進にあたり、9年間を見通した教育課程の編成に向けて小中の教職員が計画的に顔を合わせ、協議を行っているが、特に「ふるさと教育」については、系統立てて学ぶことが町の方針として重点事項の一つとなっている。

(1) 小中共通の全体計画に基づく学習

前段で紹介した有珠山は、町の宝である一方、20～30年周期で定期的に噴火を繰り返してきた火山でもあり、本町の子供たちは噴火への備えを計画的に学ぶことになっている。また、火山がもたらす恵み（温泉や火山灰土壌を生かした農業など）について学ぶことも、郷土愛を育む上で地域から強く期待されている。

そのため、これらのことを発達段階に応じて確実に主体的に考え学ぶことができるよう、小中共通の『そうべつ型ふるさと教育』の全体計画を策定し、これに基づき生活科と総合的な学習の時間を軸にした系統的な指導を行っている。

(2) 学習成果の発信の新たな試み

『そうべつ型ふるさと教育』の全体計画では、学習の集大成として、中学3年生が町議会において、より良い町づくりに向けた取組の提案を行うこととしている。学習の成果が町の施策につながっていくことは、子供たちにとって充実感や達成感が得られる貴重な機会ではあるが、町内に向けた発信だけで完結することなく、外に向けても発信できないものかと思案していた。

そうした中、昨年度、胆振教育局において「ふるさと学習」を基にした道外の生徒との交流事業が始

まることを知り、本校の学習の広がりを期待して、事業の実践校として教育局の取組に協力することを決めた。

取組は胆振管内に教育旅行で訪れる道外中学校生徒との交流で、岩手県の釜石中学校の生徒を相手に、学習してきたことを



基にした観光ガイドを行うことになった。

交流当日に向けては、オンラインによる事前交流や地域の火山マイスターの協力によるガイド体験の実施など、初めての試みに対する準備を計画的に進め、当日は和やかな雰囲気の中で活動を終えることができた。偶然にも「噴火」と「津波」と防災教育に力を入れている地域の生徒間交流となったことから、交流後の感想では、「異なる自然災害だけれど防災対策の基本は同じだと分かった」など、交流を通して、これまでの学びを更に広げ深くした生徒の姿が多く見られ、期待していた以上の成果を得ることができた。また、我が町を知らない人たちを相手に、これまで学んできたことを伝え、他市町の様子を知るこの取組は、子供たちにとって我が町の良さや課題を再確認できる貴重な機会となるとともに、郷土愛や社会参画意識の高揚が期待できる良い取組ともなった。

3 終わりに

多くの教育的効果を感じられた取組だが、道外中学校の多くが、コロナの5類移行後、旅行先を東京へ変更したことに伴い、今年度は壮瞥小学校が青森県の小学校と同様の取組を実施して多くの成果をあげた。小中一貫教育を進める本町においては、両校の成果を互いに共有し、「ふるさと教育」に限らず、全ての教育活動において9年間の学びを確かなものにしていきたい。





現在・過去・未来

別海町立野付中学校 小 崎 伸 人

図書室からラムサール条約登録地の野付半島を越え、祖母の故郷である国後島が見える。爺爺岳の麓で生まれ、父は此の地・野付で生まれた。父は晩年、朦朧とする意識の中で母からの「今どこにいる？」という毎朝の問いかけに、「国後の診療所」と応えたこともあった。行ったこともないのに。

野付中学校は私が教職のスタートを切った学校であるだけではなく、偶然にも父と母の初任校でもあるため故郷に似た感覚がある。そして、約20年ぶりに校長として戻って3年目を迎えるが、当時より生徒数は半減し、少子化が進んだ年月を実感する。

しかし、町が廃れてきたかの問いには明らかに否と答えることができる。長い時間をかけ、地域全体で資源保護や育成漁業をいち早く取り入れたことにより、鮭が不漁であってもホタテやエビ、ニシンなどの高価値である水産物が地域を支え、その効果の一つとして、漁業権がなくとも此の地に留まり、漁業に携りながら生計を立て、地域貢献しているものも多く存在している。そして、かつての生徒たちも親となり今は地域の中心として、学校の保護者として支えてくれている。

本地区では『野付学』という「ふるさとキャリア教育」を推進し、幼小中の発達段階を踏まえて系統的、継続的な学習を行っている。その反面、学校区としての教育については一貫性に欠けていた。そこで幼稚園長、小学校長と「心を動かす教育、心が動く体験」を主要語として野付地区幼小中連携グランドデザインを創り上げた。それと同時に互いのグランドデザイン形式も揃え、地区一貫教育が進んだほか、教職員同士の教育的交流も盛んになった。

この学び合いは単一学校だけで若手教員を育成するのではなく、地域の学校群が一つとなり、それぞれが課題とする身に付けたい職能を補完し合うことを可能にし、教師力も向上的方向に進んでいる。

その全ては目の前にいる子供のためであり、故郷の未来のためである。今後も未来の故郷づくりを担い、新時代を創り上げる人材育成を幼小中12年間の教育で推し進めていく。この3年間は分断とも言える日々であったが、再構築ではなく、新たな協働体制を創り上げるための大事な準備期間であったと捉えたい。過去の全ては現在につながり、現在の全ては未来を創るという思いで今を生きていく。



「趣味」をもつということ

網走市立第五中学校 壹ツ石 朋 博

「メーン」「ドーウ」。小学3年生の女の子に見事に返し胴を打たれた。タイミング、刃筋、打突の強さ、残心どれも申し分なく、六段審査ならば「一発合格」という程の素晴らしい技であった。「まいった」と声を発する。彼女は面の奥でにっこり微笑んでいた。

「次はやられないよ」と声を掛け構えなおした。

現在でも週に2回。できるだけ時間を見付けては道場に通い剣道の稽古をしている。私が剣道を始めたのも小学3年生だった。しかし、当時の私は返し胴など打てる余裕はなく、あれから53年たった今でも返し胴は苦手である。

剣道の理念は「剣道は剣の理法の修練による人間形成の道である」というものだ。人間形成の道にはゴールがない。父も剣道をしているが、89歳となった現在でも面をかぶって稽古をしている。その姿は崇高であり、打つ、打たれるなど度外視して畏敬の念を禁じ得ない。私は、いつかは「父を越えたい」と思いながら稽古してきた。称号と段位こそ父と同じ「教士七段」となったが、30年後、父同様に道場に立つことができなければ、父を越えたことにはならない。とてつもなく高い壁である。身をもってそれを示してくれて

いる父に心から感謝している。

「不易流行」という言葉がある。社会は変化し、世界は大きく変わっていく。しかしその中でも変わらないものが剣道だ。剣道の打つ、打たれるには必然がある。竹刀を介して会話し、打つべき機会を作り出し、身を捨てなければ「打ち切る」ことができないからだ。20代後半、90歳間近の範士九段の先生と稽古した。先生が「最後一本」と声を掛けた瞬間、私は「蛇にいらまれた蛙」状態になった。全く身動きがとれない。ゆっくりと小手を打たれた。防具の上から打たれたのに稽古後、手首には「くっきり」と内出血が残り、紫色になっていた。ゆっくりのはずはない。「打ち切る」とはこういうことだと教えていただいた。

学校はあまりに忙しくなり、職員の中には学校と家の往復のみという者もある。しかし、生活にはゆとりと楽しみが必要である。趣味をもつことで「生涯教育」を実践することができる。子供たちは先生方の人間性から様々なことを学んでいる。これは、どんな世になろうとも「不易」な部分であり、だからこそ教育はAIでは務まらないと思っている。これからも個性豊かな魅力ある先生が増えることを願っている。

後 期 情 報

北海道中学校長会 事務局長 三 浦 英 悟

○今年度の活動を振り返って

北海道中学校長会は、校長としての主体性と指導性、しなやかさを発揮しながら、森田会長による「新たな時代へ『連携』し、『しなやか』に歩む 道中」を合い言葉に、全道 20 地区 561 人の会員相互の連携のもと、全道の中学校が抱える諸課題の解決に努め、新たな中学校教育の創造を目指し、道民の負託に応えてまいりました。

今年度は、新型コロナウイルス感染症の位置付けが5類へと移行され、国が進める GIGA スクール構想の着実な推進、誰一人取り残されない学びの保障、一人一人に個別最適な学びや協働的な学びの実現等が求められる学校経営となりました。そのような中、道教委・道小をはじめとする関係機関との緊密な連携と、地区校長会との協働や情報共有を大切にして、新しい時代の学校教育「令和の日本型学校教育」の構築と、本道の中学校教育の振興を図ってまいりました。

以下にお示しする内容はその一部です。

- ・文教施策・予算要望に関する要望書の送付
- ・道教委との意見交換会・各課懇談会の実施
- ・道小とともに道教委との連絡会議の開催
- ・地区別教育経営研究会への参加（通常開催 18 地区、WEB 開催 1 地区）

- ・会同による理事研修会等の開催
- ・第 64 回北海道中学校長会研究大会小樽大会の開催
- ・道教委の各種施策への意見・要望の集約

○第 64 回北海道中学校長会研究大会小樽大会の開催

9 月 22 日、23 日に開催した第 64 回北海道中学校長会研究大会小樽大会は、300 人を超える参加者が集まり、4 年ぶりの会同形式での開催となりました。

小樽市中学校長会の皆様には、きめ細かい準備と心温まる運営をしていただき、心より感謝申し上げます。今大会の成果が、来年度の第 75 回全日本中学校長会研究協議会岩手大会、そして、第 65 回北海道中学校長会研究大会十勝・帯広大会に引き継がれることを願っております。

○来年度の事業について

新たな教育振興基本計画が閣議決定され、大きな教育改革が進む中、部活動の地域移行、学校における働き方改革への取組等、課題は山積しておりますが、「子供を主語」とした教育活動を根底にし、本道の中学校教育の更なる振興に努めてまいりますので、今後とも御指導と御理解並びに御協力をよろしくお願いいたします。

来年度の事業計画は、2 月に開催される第 5 回理事研修会を経て、4 月の総会で決定となります。

受賞おめでとうございます（道中関係分）

☆令和 5 年度文部科学大臣教育者表彰

野崎 均 校長（北海道中学校長会前会長 登別市立緑陽中学校）

☆令和 5 年度北海道教育功労者表彰

大橋 宏朗 校長（七飯町立大沼岳陽学校）

緒方 隆人 校長（北見市立北中学校）

村松 正仁 校長（帯広市立大空学園義務教育学校）

道中事務局日誌

2023. 10. 1～12. 28

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
10	3	火	地区別教育経営研究会【札幌中】（三浦、高橋(正)） 教育研究論文審査会（弘済会）（森田） 地区別教育経営研究会【石狩地区】（北村）	13:00 14:00 15:00	ホテルライフォート札幌 自校 北広島市石狩教育研修センター
	5	木	第6回事務局研修会（五役、筆頭副会長、各部幹事、専任職員） 第3回道中体連副会長会（笹川）	10:30 13:00	ホテルライフォート札幌 第二水産ビル
	6	金	地区別教育経営研究会【檜山地区】（川原） 地区別教育経営研究会【十勝・帯広地区】（三浦・田丸）	9:30 12:50	せたな町せたら町民ふれあいプラザ 幕別町札内コミュニティプラザ
	10	火	第64回北海道中学校長会研究大会小樽大会終了挨拶（森田・三浦）	10:30	小樽市役所
	12	木	地区別教育経営研究会【空知地区】Web（小泉）	15:00	自校
	16	月	全日中大分大会北海道提案者最終リハーサルWeb（五役、副会長、研修部、専任職員）	10:00	自校、道中事務所
	20	金	第2回道中体連常任理事会（笹川）	13:30	第二水産ビル
	21	土	日本PTA北海道ブロック研究大会札幌大会（森田）	18:00	ホテルロイトン札幌
	22	日	日本PTA北海道ブロック研究大会札幌大会（森田）	9:30	カナモリホール
	23	月	第6回小中合同研修会（五役） 北海道教育会議運営委員会Web（三浦）	10:30 14:00	道中事務所 自校

月	日	曜	業 務 内 容	時刻	場 所
11	24	火	日本教育会北海道支部 第3回北海道大会実行委員会(吉本)	15:00	ホテルライフォート札幌
	25	水	全日中常任理事会(森田), 理事会(三浦, 笹川, 長谷川) 分科会運営委員会(橋本, 佐々木, 増田, 後藤), 歓迎レセプション	12:30	杉乃井ホテル
	26	木	第74回全日中研究協議会大分大会【開会式・文部科学省説明・研究協議・分科会】(北海道参加者85名)	9:30	ビーコンプラザ, 杉乃井ホテル
	27	金	第74回全日中研究協議会大分大会【アトラクション・全体会・記念講演・閉会式】(北海道参加者85名)	9:20	ビーコンプラザ
	28	土	令和5年度北海道青少年科学技術振興作品審査会(松橋)	9:00	札幌市立手稲山小中学校
	30	月	第2回学校保健審議会(河村)	15:00	北海道医師会館
	31	火	第4回五役研(五役, 専任職員) 「北海道教育の日」第16回制定記念行事(吉本)	10:30 15:00	道中事務所 ホテルライフォート札幌
	2	木	第51回HBC中学生作文コンクール最終審査会(高橋(正)) 第2回道中体連理事会Web(笹川)	13:00 13:00	北海道放送本社 自校
	8	水	日本スポーツ振興センター災害共済給付事業運営協議会(川原) 第1ブロック研修会(森田)	14:00 16:00	北海道建設会館 小樽
	10	金	運営委員交流会(会長, 事務局長, 会計理事, 運営委員, 専任職員) 第4回理事研修会(五役, 副会長, 地区理事, 幹事, 運営委員, 専任職員) 道中研全体研修会(五役, 研修部, 小樽実行委員会, 十勝準備委員会, 専任職員)	10:30 13:45 15:30	道中事務所 ホテルライフォート札幌 ホテルライフォート札幌
	11	土	日本教育会 第48回全国教育大会 北海道大会(森田, 三浦, 吉本)	9:00	ホテルライフォート札幌
12	14	火	令和5年度 第2回 奨学生選考委員会(野口)	13:30	ガーデンパレス
	17	金	青少年育成運動活性化研究協議会(小泉) 第2回全日中副会長会(森田) 第9回夜間中学校等に関する協議会Web(伊藤) 4ブロック研修会(笹川) 悪天候により参集中止	10:00 14:30 15:00	かでる2・7 全日中会館 自校 紙面開催
	20	月	学校における不祥事防止対策会議(河村)	10:00	道庁別館
	21	火	第7回小中合同研修会(五役) 第3回教職員互助会理事会(河村) 日本教育公務員弘済会第2回支部幹事会(三浦)	10:30 13:30 17:30	道小事務所 損保ジャパン札幌ビル ライフォート札幌
	24	金	北海道いじめ問題対策連絡協議会(河村)	14:00	第二水産ビル
	26	日	北海道学校保健・安全研究大会(笹川)	9:20	ホテルノースシティー
	29	水	学校管理職特別研修会(三浦, 吉本, 笹川, 高橋(正), 田丸)(森田Web)	14:00	札幌TKPカンファレンス2
	1	金	北海道教育会議(笹川, 吉本, 高橋(正))	14:00	ホテルライフォート札幌
	3	日	令和5年度北海道青少年科学技術振興作品展表彰式(吉本)	13:00	札幌市生涯学習センター ちえりあ
	8	金	第7回事務局研修会(五役, 筆頭副会長, 各部幹事, 専任職員)	15:00	ホテルライフォート札幌
	9	土	第42回全国中学生人権作文コンテスト旭川地方大会 表彰式(森田)	13:00	旭川大雪クリスタルホール
	13	水	令和5年度第2回小中学校免許状併有のための認定講習検討会議Web(河村)	13:30	自校
	15	金	令和5年度北のめぐみ愛食道民会議・どさんこ食育推進協議会Web(高橋(正))	14:00	かでる2・7
	20	水	令和5年度北海道教育実践表彰選考会議(坂本)	14:00	TKP札幌ホワイトビルカンファレンスセンター
	21	木	令和5年度特別免許状授与事務第2回審査に係る特別免許状検定協議会Web(河村)	9:00	自校
	26	火	令和5年度第2回公立学校共済組合北海道支部保健事業検討委員会(伊藤)	9:30	ホテルライフォート札幌

北海道中学校長会

発行者 会長 森田 聖吾

編集者 道中情報部

事務局 札幌市中央区北1条西3丁目敷島プラザビル4F TEL011-251-1344 FAX011-251-1302 <http://www.dochu-kochokai.jp>